

銀のスプーン

33集

銀のスプーン ペンクラブ

まえがき

『銀のスプーン』の生みの親であり、長年編集発行を続けてこられた三宅啓弘さんが亡くなって二年五カ月が経ちました。創刊二十六年、本離れが進む中、市民の文化、地域の文化として宮々と引き継がれてきました。この小さな灯を守っていかなければと思っています。文芸に縁のなかった私が編集を引き受けて五年になります。三宅さんの遺志を継いで頑張りたいと決心しています。皆さんの支えによって、この事業は成り立つと考えています。

昨年を振り返りますと、三月に三十二集を発行いたしました。「東北大震災・大津波・原発事故」「家族の絆」の企画テーマと三宅さんの追悼集として三百ページを超える大冊となりました。

岡やすえさんは県会議員活動二十年の記録『ともに生きるⅡ』を出版。三月十七日には宝塚ホテルで「旭日小綬賞」受勲の記念祝賀会が催され、数百人がお祝いに集いました。池上正示さんは前集でお知らせしたように熊本県民文芸賞を受賞、作品集が三月一日出版されました。『本妙寺の近代遺跡』の題で本妙寺の加藤清正公の遺品の紹介と、文化遺産の保護の重要性や

意義など書かれています。熊本へ旅行の節は池上住職を訪ね加藤清正公の文化遺産など鑑賞ください。

計報もありました。ヴェトナム残留兵として戦後の困難を乗り越えられた高松の橘正義さん（『戦争は人類に何一つ幸せをもたらしません』三十集）が四月に亡くなりました。享年九十二歳。拙宅での五十年ぶりの親子対面は劇的でした。闘病生活を続けてこられた増田末美さん（『私の俳号はマドンナ』『飛行船』三十一集）が七月三十日に亡くなりました。宮崎の高松直彦さん（『懐かしのバプアニューギニア（上・下）』三十・三十一集）が十月八日亡くなりました。享年八十四歳。ご冥福をお祈りします。

十二月には総選挙があり、民主党政権は壊滅し、自民党政権が誕生しました。維新の会やみんなの党が票を伸ばし、左派政党はますます後退しました。竹島や尖閣問題、北朝鮮拉致などから右傾化が進みました。

三十三集は心配をよそに多くの投稿をいただき、ここに発行の運びとなりました。企画テーマは前集に続き「東北大地震・原発事故」「家族と絆」と設定しました。

三十九点の作品を四つのグループに分けました。

東北大震災・原発事故 大震災報道をテレビで見た鈴木さんはその思いを短歌で表現、当時の記憶が甦ります。旅行がライフワークの小森さんは震災後の現地を訪ねその様子を。創刊当時からペン友の尾島さんの姉上の植月京子さんが初参加、二作品をいただきました。被災地を訪れ、そこから得た教訓を。スウェーデンの国籍を持つシヨール・マテさんが初参加。速水さんの日本語学校の優等生で、日本留学の機会に震災ボランティアに参加。難しい漢字も使つて巧みな文章表現は日本の学生以上。浜本さんは反原発デモの動きの中から日本の行方を。恩田はOB総会で催された原発シンポジウムの発言から。新妻さんはベトナムへの原発輸出について現地の社会的な動きを。福留さんは安全管理の立場から原発事故を分析。

家族・別れ 植月さんは、戦時中の困難な時代に育てられた母の思い出を。三十二集には妹の尾島さんが父の思い出を書かれています。ともに家族の強い絆を感じました。大西富子さんも初参加で戦時中の父との心の交流を。尾島さんは一族から託された遺品との格闘記を。戦時中フィリピン沖で撃沈され、九死に一生を得た磯崎隆子さんが初参加、戦争で亡くなった方々の慰霊の旅を俳句と短歌で。速水さんは旧友の増田さんの俳句教室のみなさんの追悼句を。池上さんは心に残る人への追悼を。作家の田麿さんは異端児・東郷健の訃報を新聞で知り、椎名

麟三との関係と合わせ、その生き方を。徳永さんは恩師の個展の思い出を。

文芸・歴史・旅 俳句、エッセイ、新作落語、書評をまとめて文芸としました。常連の大和さんは丹波竜と題して俳句を。牧さんは中国清朝の伝説の美女香妃に思いを馳せ。芹生さんは好きな音楽タンゴについての思いを。北上さんは普段の暮らしの中からさわやかなエッセイを三点。前川さんは異業種交流「一金会」の講演から現役時代の歌にまつわる思い出を。作家の田磨さんは夢前潔のペンネームで新作落語を。池上さんは西日本新聞に一月から八月までの毎週『本妙寺から見える』を連載されましたが、その冒頭のエッセイを寄稿いただきました。千葉さんは書評を。小嶋さんは西宮の満池谷墓地にあるレリーフから昭和初期の飛行機開発にまつわるエピソードを幻想的に。震災ボランティアとして石巻に行かれた飯塚さんは、江戸時代に遭難し世界一周をした漁民の供養塔について。郷土の歴史に詳しい菅原さんは大河ドラマ「平清盛」に関連し、鎌倉幕府と大江匡房の関係を。スウェーデン在住四十年の速水さんは現地の人が踊る白拍子に感激。ミクロネシア友好NPOの理事長の小森さんは直行第一便に乗り、その紹介を。オーストラリア大ファンの河合さんはザリガニ捕り第二編。

病む・子ども・法 奇妙なくくり方になりましたが、なんとかつながりました。北上さんは

心臓手術の苦い思いを。健康が売り物の恩田がヘルニアに。元校長先生の鈴木さんは子どもたちを暖かく見守った頃を。小学校の先生の村山さんは問題になっている「いじめ」を。弁護士相馬さんは大人の「いじめ」パワハラについて法の観点から。最後の植民地と言われる西サハラは独立問題に取り組んでいる平田さんは、竹島問題の解決を国際司法裁判所に期待できるのか疑問を投げかける。

以上のように初参加の四名を加え、二十八名の作品がそろいました。いずれも力作です。読後の感想をお待ちしています。この他にも、参加予定のペン友が闘病などで断念されました。療養中の方々の一日も早い快復をお祈りします。

三十四集の原稿募集 引き続き三十四集の原稿の執筆をお願いいたします。投稿規定は変わりません。春に一次募集、夏に二次募集、秋に最終募集、来年三月には発行と考えています。末永くお付き合ってください。

二〇一三年三月

編集長 恩田 怜

編集委員 芹生弘、村山茂、池上正示

目次

まえがき

東北大震災・原発事故

東北大震災 —— テレビ画面から	鈴木 正二郎	12
福島に思う	小 森 宰 平	14
東北の天津波で知ったこと	植 月 京 子	20
石巻でのボランティア活動	シヨール・マテ	24
福島の子どもたちを迎えて	恩 田 怜	32
「兵庫県のキャンプに参加して」 小学三年 白谷莉帆		
デモをする人びとの出現	浜 本 純 逸	38
—— 反原発デモの意味するもの ——		
原発シンポジウム	恩 田 怜	49
ベトナムでの原発建設	新 妻 東 一	57

前兆現象あれこれ.....福留正治 61

家族・別れ

母とわたしの昭和史(1).....植月京子 68

私の昭和史 元町編.....大西富子 85

むかし、むかしの絹の羽織.....尾島生子 90

慰霊(俳句・短歌).....磯崎隆子 102

マドンナ窓女夏に逝く(俳句).....速水妙子スヴェンソン 106

山内三恵子さんのこと.....池上正示 108

荒野への途上で.....田麿新 112

訃報を見て これきりですか東郷健 偽らざる性 あの世にも

個展の思い出.....徳永菊代 124

文芸・歴史・旅

丹波竜(俳句).....大和齊 130

香妃幻想……………牧 彰 132

——秋の宵の芳醇な花の香に魅せられて——

タンゴへの旅……………芹 生 弘 136

慕 情……………北 上 弘 美 140

風向き……………北 上 弘 美 142

デウスの手……………北 上 弘 美 144

誰でも「私の愛唱歌^{うた}」を持つている……………前 川 晋 146

新作落語「水虫は甘いか苦いか」……………夢 前 潔 150

大みそかに迎える試練……………池 上 正 示 156

書評「ひょうごのロングセラー 115」について……………千 葉 俊 壹 161

テスト・パイロット海江田信武……………小 嶋 裕 163

石巻と若宮丸漂流民……………飯 塚 修 三 174

鎌倉幕府をプロデュースした大江氏……………菅 原 巖 182

スウェーデン女性 白拍子を舞う……………速水妙子スヴェンソン 186

成田空港くミクロネシア 直行第一便に参加……………小 森 宰 平 190

オーストラリア物語(2)	河合成一	198
--------------------	------	-----

病む・子ども・法

負のスパイラル	北上弘美	204
---------------	------	-----

——入院体験記——

ソケイ・ヘルニア	恩田 怜	217
古いノートから	鈴木 正二郎	222
子どものいじめは親の責任	村 山 茂	230
パワハラと法律	相 馬 達雄	234
国際司法裁判所とは	平 田 伊都子	238

——竹島領土紛争と西サハラ領土紛争——

あとがき

「音にきく鼓が瀧」西行歌碑、西行の歌碑を愛する会
寄稿者紹介

東北大震災・ 原発事故



東北大震災

——テレビ画面から——

鈴木 正二郎

平成二十三年三月十二日

唸り上げ 堤防超えて 町を呑む 黒き濁流 人知を超えて
高台に 逃れし人を 追いかけて 憎き激流 家々碎く

三月十四日

逝きし父母 悲しむいとまも あらずして 生ある人を 助けに向かう

三月十五日

避難所で マイク向けられ 感謝の辞 着の身着の儘 逃れし人が

三月十八日

外電は 津波の凄さ 報じつつ 略奪のなき 民を称えぬ
被災後に 助け合う人 外電は 驚き伝う 崇高なりと

三月二十日

自衛隊 放射線満つ 原発へ 敢然向かい 水放ちゆく
消防士 放射止めんと 立ち向かう 畏敬の念持ち 画面見守る
隊長は 部下を思いつつ 会見で 言葉つまりて 涙込上ぐ

三月二十一日

湯につかる 赤子の笑顔 避難者の 沈みし心 少しほぐしぬ

福島に思う

小森 宰平

友人に「福島へ行く」と言ったら、何人かから「何で」と問われた。観光旅行するならほかに行くところがたくさんあるのに、何で福島へ？」ということだ。

あの日以来、東北、福島という切ないニュースばかり。前に阪神淡路大震災で家屋の全壊判定を受けている身には、特に辛く伝わる。あの津波の絵地獄、放射能汚染に見舞われ、今も立ち直りに苦しむ多くの方々…。

出発が近づいたある日の朝刊に「東日本大震災から一年半Ⅱ農漁業・食の安全 回復は農地四割、漁獲六割」とあり、裾見出しには「際立つ福島の厳しさ」とあった。福島の漁業では福島第一原発事故の影響が深刻に尾を引き、農地は除塩作業が思うに任せず、農地再開はわずか八%にとどまっているという。

旅に関わる仕事をしてきただけに、かつて親しんだあの観光地・旅先がどうなっているのか、

訪れてみたい思いが募る。行こか行こまいか、揺れ続ける中で、某交通社から「神戸空港発着一泊二日のツアー」の案内が届いた。ツアーのキャッチコピーは『がんばろう福島大総力祭二日間』。神戸空港なら自宅から近い。行ってみよう。

少し前に福島を訪ねた友人から「空港ががらんとしていた」と聞いていた。神戸空港から茨城空港へ一日二便飛んでいるスカイマークに乗った。かなり空席がある。運よく窓から富士山が見え、写真を撮る乗客もいてくつろぎムードになったら、すぐに着陸体勢をとり降下開始。空港敷地は驚くほど広い。広いのは道理。あとで知ったのだが、ここは百里飛行場といい、もともとは航空自衛隊のものであった。それが二〇一〇年に官民共用空港になり、民の方は茨城空港になった。

さて神戸空港からの飛行時間一〇分ほど。関東圏でも最も東北寄りの茨城がこんなに近かったとは。ロビーに出るとひっそりして見える。ここがにぎわうのは、一日二往復の神戸便と、ほかには一日一便、北海道と沖縄便が発着しているとき。週六日、上海とも結んでいるらしいが、専用カウンターにはだれもいない。

ツアー一行は三十四人。全員が中高年のようだ。茨城県の旅行社の観光バスに乗って、福島

県の小名浜に向けて出発。一般道からすぐに常磐自動車道に乗ったが、いくら走っても対向車、追い越し車を見かけない。不安になるほどひっそりしている。「震災復旧工事中」の看板が出てくるようになって、片側車線を工事ストップしている個所が多い。ガイドさんが「この路線はもとも赤字路線でしたが、震災後さらに通行量が減ってしまった。だから復旧工事は赤字路線は後回しになっているんです」と教えてくれた。この工事規制は、旅の後半まで続いた。

小名浜港に近づいた。殺風景ではあるが、さほど被災のダメージは感じられない。しかしここを二〇一一年三月十一日午後三時三十九分、地震からほぼ一時間後に高さ三・三メートルの津波が襲った。これも後になってのことだが、帰宅後、パソコンでいわき市を検索したところ you tube に津波直後の小名浜港周辺の様子が記録されていた。建物はほとんど形をとどめておらず、今回われわれが買った物産店も津波後に再建されたもの。新しい海産物店はずらりと並んではいるが、観光客はまるでおらず、小名浜観光はおなじみフラガールによるハワイアン・ショーだけが背負って立っているようだ。

フラ公演のないウィークデーの港を歩いているのはわれらツアー仲間だけだった。不勉強で恥ずかしいことだが、福島は四国に似た形で東西が長い。その東の太平洋側から新潟県の県境

までを三分して、太平洋側を浜通り、真ん中部分を中通り、最後の西部分を会津地方と呼び、天気予報もそう区分されている。小名浜地区は浜通りで、再び磐越自動車道を北上、本宮市で東北自動車道に移り、二本松ICで降りて、今度は磐梯吾妻スカイラインで浄土平を目指した。浄土平は海拔一七〇〇メートルの高所にあり、当然道路は日光の〴〵いろは坂〴〵を思わす急カーブの連続で、本来なら対向車、追い越し車でハラハラドキドキ・ウエーなのだろうが、行き交う車はまるでない。午後三時過ぎ、硫黄のにおいの中、浄土平に着いた。かなり規模の大きい土産物センターは、客が来ないからだろう、早々と閉店準備をしていたが、バス到着を知って再開店するなどおよそ観光地らしくない。

このあたりから次の訪問地・五色沼は〴〵中通り〴〵地域になる。五色沼は湖沼群の総称だが、湖を巡るうちに観光客や観光バスを見かけるようになった。湖沼群に近い裏磐梯のホテルもなかなかの賑わいを見せている。ウィークデーでこれなら、土、日にはもつとにぎわうだろう。

旅の二日目は中通りから会津地方へ。まず会津白虎隊で知られる飯盛山を訪れたが、雨にもかかわらず大勢の観光客がいる。そして最後の観光地・大内宿で沈んだ思いが払しょくされた。大内宿は江戸時代の下野街道の一宿場で、昔の宿場の面影がそっくり保存されている人気拔

群の観光地である。紅葉シーズンには駐車場が満杯になり、駐車できずに引き返すこともあると聞いた。紅葉の前でそれほどの混雑ではなかったが、人気「ネギ蕎麦」の店には客がひっきりなしに詰めかけているし、土産物店も活気がある。売店のおばさんも「去年は一時期お客が減ったけどまた戻ったよ」と笑顔を見せる。会津地方には他にも尾瀬をはじめ檜枝岐、只見など名だたる観光地がある。会津地方は健在なのだろう。

「旅行ペンクラブ」という旅に関するマスコミ組織に参加している。新聞、テレビ、ラジオ、その他活字媒体のプロ集団で、各地の旅・観光に関するデータを集め、正確な情報として発信する。今回の福島行きは、旅人としてのやむにやまれぬ衝動もあった。

帰った日に大阪でクラブの月例会があり、神戸空港からそのまま参加して、仲間にホットな思いを伝えた。震災のつめ跡がまだ生々しく残る浜通り。観光客が去った観光地。一方で勢いを取り戻してきた地域。しかし一口で福島は語れない。福島を支援しなければならぬのは分かる。だがみんなに「福島へ行こう」と情報発信できるのか。クラブの仲間はいばらく押し黙っていた。

九月末、神戸新聞夕刊の随想欄に、東北大学教授で小野市教育行政顧問の川島隆太氏が「原発

事故と東北」の題で書いておられた。一部を抜粋する。「…私の住む仙台では、現在環境放射能は事故以前とほとんど変わらない状態になっています。ぜひ、皆さん、四季の美しい東北に遊びに来てください。一方で、福島第一原発周辺に住んでいた方々が、自分が生まれ育った土地に、おそらく一生戻ることができないという事実も忘れないでいていただきたいと願います。仙台の街は不況をよそに元氣になりつつあります。しかし沿岸地域では、復旧・復興とは程遠い状況にいまだにあります。買い物で宮城や岩手の物産を見かけたら、一つでよいので買ってくださいねと願います。それが、第一次産業を主力とする被災沿岸部の直接の支援になります。」。抜粋が長くなったが、読みながら何度もうなずいた。福島支援は、まず安全宣言の出された農産物、水産物の購買から。そして、徐々に観光地復活を支援できたらと願っている。

東北の大津波で知ったこと

植月 京子

僅か前のニュージーランドで起きた地震と大津波のとき、私は同じ太平洋地域の東北を心配していた。また、あの二日前にもかなりの地震があり、ニュースで聞いたが東北地方は慣れた。こののだと思った。私は常々一度東北に観光に行つて見たいと思つていたが後回しになっていた。

今度の地震では、老齢と通院の身にも少々の寄付以外に出来ることはないかと思つていた。国会では、国土大臣が「国民の皆さん、これを聞いている皆さん、仮設住宅を建てたいのでお世話ください」と何回も頭を下げていた。私は本当かと思ひ協力心がわき、近くの広い調整区域の空き地一帯を、横浜にも広い安心の場所があると国土庁や横浜市の窓口にも直接訴えたが、取り合ってもらえなかった。神奈川県では、公立の空き部屋の提供で充分としていた。テレビや新聞はいろいろなニュースを伝えてきた。神奈川のあてがわれたマンションに入居しても手

持ちの皿や、ちゃんがなくて困っており、着替えも欲しいとの被災者の声があり。「ならばどうやって必要なものを届ければよいか。また、少しずつでも、各家庭に筆筒のこやしとなっているものなどを、一カ所に集めて取りに来てもらえば整理も出来、一挙両得です」と地域の福祉センターに言ったが取り次いでもくれなかった。緊急事態に対する近県の政治的な協力対処が瓦礫の処分にも見られるように欠乏している。自分がそうなったときには体面を重視するのみで本当に役立ってくれるのかと、わが県や市政に感じている。

被災地へのボランティアとしては、東北へ旅行して、買い物をするという方法もあるとのこと、旅行会社のツアーに加わり、十月に岩手、十一月に宮城に行った。岩手は釜石市大槌の漁村を訪問した。姿の無い駅舎、波止場、曲がった堤防、山の中腹より下は流された家のあとコンクリートの仕切りがばらばらに散乱。助かった中腹に住む部落長の話が聞けた。

私は質問した。「地震の発生と、津波の間は四十分はあったと思いますか？」

曰く「平素の訓練も良く聞こえる拡声器を使っています。早く避難するよう、今回は何回も放送しました。しかしなかなか上がって来ないので、息子が老齢の両親を迎えに行き、父親を避難させ、次は母親をと、迎えに行ったきり二人とも帰りませんでした。御覧なさい、向こう

に大きな岩があります。あれは明治二十八年の津波のときに押し寄せた岩です。最近では新しい人があの岩の下一帯に家を建て入ってきました。それらは全部流されました。今回の津波はあの岩以上で、私の車庫の所まで来しました。津波は引き際が恐ろしいです。物凄い音です。それから皆さんに是非言っておきたいのは、逃げるときは現金を持って逃げてください、ということです。下着を売りに来ても買えないのです。私は幸い五万円持って出ていました」と。

津波後、ちょうど七カ月経っていた。整理はされていたが瓦礫の山が各所にあった。電車は二駅間が開通しており、その電車に乗り両側の津波の跡を一望できたが、人影も無い。テレビでは一部始終を見ていたが、実際に来て見て地震・津波の防災法がいかに極小であったかとわかった。岩手には泊まる所が無いので青森まで足を延ばした。翌日再度、岩手の被災した海岸線を通り、仮設市場へ買い物に行った。有名な南部鉄瓶も買い、毎日のお茶を美味しくいただいている。

二回目は、松島に行った。沢山の島が津波を防ぎ、水浸しにはならず安堵したとのことだった。しかし、笹かまぼこ工場は全部の機械を駄目にして、最近やっと開店したばかりだそうで、かまぼこを沢山買った。

家を建てる場所について思ったのは、平素、海の近くは便利が良くても、こんな災害があつて逃げる時には、脚、腰の弱い年寄りには不適格な場所だ。山が崩れる場所も不可、住民として地勢の安全な所を選ぶべきだと認識した。

石巻でのボランティア活動

シヨール・マテ

地震の時、私は故郷スウェーデンで二度目の日本留学を秋に控えていた。テレビで生き埋めになった人々や全半壊した校舎や人家といった悲惨な光景を見せられるばかりだった。助力に駆け付けることができないことが「居た堪れないとはこのことか」と思うほど悔しかった。

ところが今年、私の念願が叶った。留学生八人で二〇一二年二月十三日から十七日まで宮城県石巻市へ一般社団法人「プロジェクト結」のもと、ボランティア支援活動に行くことができたのだ。私が参加した活動は毎週ボランティアが入れ替わるものだった。いつもは日本人が参加しているらしいが、今回は、留学生に教室で学べる日本ばかりでなく、地震国としての日本をも経験させようと、大学の先生が我々外国人を招いてくれた。

石巻でのボランティア活動について

鰯を生産する会社の社長宅に宿泊した。伝統的な日本民家だったので夜は寒かったが、毛

布を何枚も掛け心地よく眠ることができた。ほとんどの時間を男性女性ともこの社長宅で過ごしたが、夜は人数の都合で女性も隣の鱈子工場の寝室で寝た。社長宅も津波による被害を受けていた。家の中の壁を見ると、床から人の腰の辺りまでと、その上とは色が少し違う。そこが泥混じりの津波が押し寄せてきた時の水位を示しているらしかった。しかし家の中は今や清潔そのものだった。綺麗に掃除されて「プロジェクト結」の活動のために貸されている。

朝食はめいめいがコンビニで買って来たが、私は自炊もした。一度目は和風に焼き鰯に味噌汁、白いご飯だった。二度目はスウェーデン風にミルク粥を作ってみた。共に好評を博した。

午前中は三校ほど小学校を訪ねて小学生に母国の紹介をしてから、図書の整理をしたりした。児童は極めて元気だった。興味津々に各人の発表を聴いて、発表後の質疑応答では積極的に挙手して質問をしてくれた。余談だが、この教師児童間の円滑な、双方向的なコミュニケーションは、いまどきの大学では減多に見えない痛快なものだった。図書の整理というのは、もともと教諭の仕事だそうだと。ところが、震災で授業が遅れており、それを挽回するために朝から夕方まで教えているため、事務や図書の整理という仕事をこなす時間がない。そこで我々ボランティアが助力をしたわけだ。

正午は「まるか」という寿司屋兼料理店の魚屋で刺身定食を食べた。刺身は日替わりで3枚ずつにご飯の大盛りが可能で、揚げ物や漬物と味噌汁も付いた豪華な食事を毎日楽しむことができた。それも6000円で。東京だったら10000円はしただろう。

食事が終わると旧市庁舎で支援物資の仕分けをした。文房具やランドセルからボードゲームや玩具まで多種多様に日本各地から送られてきていた。ここで初めて支援物資の仕分けという作業がどれほど手間の掛かるものかを知った。人が被災者を支えるために物を送ってもそれは直接支援に繋がらない。それを受け取り側が受理し保管する場所も確保し分類して、被災地の何処で誰がそれを最も必要としているかを把握してから届けるという骨を折るような仕事をした時に初めて、人の支援に繋がるのである。つまり支援物資は被災者を想い、物を贈る人とそれが必要な所へ届ける人との努力の賜物なのだ。

しかし一度限りのボランティアとして来ている私が理性で分かっている「これが人の支援に繋がる具体的な場面を視たい」と思わずにはいられなかった。そして願ったり叶ったり、それを実際に目の当たりにすることができた。小学校へ母国の紹介をしに行った時、目の前の児童が手にしているノートや筆箱や文房具などは全部、支援物資として送られてきたものだった。

人が人を助ける具体的な場面を視ることができて、心が温まった。

午後は仮設住宅の集会場で子供達と時間を過ごした。石巻の住民は津波に因る破壊で生活の場を失ったが、そうした場を、特に子供達が遊んだり学んだりする場を「プロジェクト結」は「みんなの場」と称して取り戻してくれていた。仮設住宅の集会場で、料理や編み物、習字、絵描き、体を動かすテレビゲーム、その他の遊びや活動が開催される。私は習字と外遊びに専念した。外遊びの疲れを習字で憩い、体力が回復するや否やまた直ぐ快活に肩車をさせられるなどして酷使されていく。容赦なく遊ばせられながらも力は尽きない。これが子供のもたらず恩恵なのだろうか。震災の爪痕なぞ跡形もなく、子供達の顔を見ると、そこには未来へと邁進するド根性と希望があるのみであった。

夜は食事とその日の反省会（これを「振り返り」と言っていた）をしてから、各人自由に行動した。温泉に行く人もいれば、晩酌をする人や音楽を演奏する人もいた。私はブラジルの慈恵^{じえ}とたびたび、社長宅にあったギターと慈恵悟が持つて来たギターでデュエットをした。和気藹藹に「プロジェクト結」の団員で楽しんだわけだ。こうした「自由時間」に入っても、その日感じた事や、震災や支援活動をめぐる考えなどを夜更けまで語らい続ける人もいた。

このようにして石巻での約一週間は過ぎた。

支援活動以外の経験や感じた事

小学校と旧市庁舎と仮設住宅での活動に連れて行ってもらうほか、石巻の港も見せてもらった。清掃が行き届いており、瓦礫は殆ど片づけられていたが、全壊した工場などはともかく、全半壊した人家を見るのは、とてつもない痛みを胸の奥に埋め込んだ。風に揺らぐ色褪せたカーテン。目を細めて奥を見ると、崩れた壁、ドアの欠けた戸口。埃だらけの生活用品や壊れた家具。残骸がひとつひとつ、私に話しかけているような気がした。寂れた町の痛いほどの静けさは、それらの話し声を、全身が引き締まるような叫び声に拡張させて、ほやけた言葉が次第にはつきりしてくる。その叫び声と壊れた人家の光景の合唱が、無意識に目を逸らそうとしていた現実を、私に訴える。「ここではかつて…人が生活をしていた」と。

東京に戻って一週間の経験を振り返っているとふと思った。被災した人々が余儀なくされている生活ぶりを見て悲しむのは被災していない我々だけなのだ。被災者達は身内や生活の場を失った苦難を乗り越えて今も生き続けている。なぜなら、そうするよりほかないからだ。そういうしないことを選んだ末に生はない、未来もない。今にも日常を取り戻そうとしている彼らに

悲しんでいる連はない。悲しむ余裕があるのは、直接に被災していない我々だけなのだ。感情を殺せとは言わないが、もっと効率高く復興を進めるには、被災者達のように、または「プロジェクト結」の団員もそうしているように、悲しみを乗り越えてひたすら前向きに頑張らないといけない。その証拠として、と言うとおかしいが、ここで連想して思い出すのは、笑顔で「また再建しよう」と言っていた震災直後にニュースで観た男性の言葉である。

仮設住宅の集会場で朗らかに遊んでいる、いかにも幸せそうな子供達の姿と、その横で和氣藹藹に語り合うお年寄りの姿を見ると、そう思わずにはいられない。支援に来ている私はひたすら奉仕する精神で以下の作業に取り組んだが、いろいろと考えさせられた。

旧市庁舎で支援物資の仕分けをしていると時々、大変使い古された物が出てくる。「これを人にあげるのか」と分類作業を一旦やめる。私の言う「使い古された」は相当なボロさのことだ。ランドセルは手をそつと触れるだけで革がはがれて物を入れれば底に穴が空きそうなものが、ノートには落書きだらけのものがあつた。「これを人はもらいたがるのか」と再び思う。

ボロな物だろうと新品だろうと、それを支援物資として送ってきた人の気持ちは変わらない筈だ。自分にそう言い聞かせようとするが、それは綺麗事だと直ぐに悟る。少し削られた鉛筆

ならば、まだ使えるが、致命的に古びた物を支援物資として送ってくる人に、ここで一つ理解を乞いたい。被災地はゴミ捨て場ではない。しかし次々とボロボロな物が送られてきては、やがてゴミの山になってしまい、それらの処分に手が焼ける。時間も掛かる。使える物を、それを必要としている人へ届けるのに費やしたかった貴重な時間を、使えない物の処分に浪費せざるを得ない。支援活動について学んだ事の一つである。

「みんなの場」でも出会いがあり、多くの事を学んだ。多くの子供達の中で、特に元氣過ぎる子として、「りょうた」が目立った。後にこのりょうたのお蔭で、私は子供をもつような喜びを知ることになる。「みんなの場」を訪れた当初は乱暴に振る舞っていたが、これは肝試しのようなものだったらしい。大人の限界を確かめ、仲間に入れるか否かをこうして子供は決めるのだろう。引つ搔かれたり噛み付かれたりの苦戦に勝ったせいか、やがてりょうたはおとなしくなり、私を認めてくれたようだった。その瞬間に覚えた喜びは大きい。それは多分、無意識にりょうたに認めてもらいたかったからだろう。対等な人間として私を見てほしかったからだろう。そして私はそれに夢中だった。その新しい仲間と一緒に遊んだ喜びも大きかった。まるで別世界だった。二人で出かけた冒険には、丈夫な枝を見つけて氷を割りに行ったり、肩車

して「10キロランニング」をしたりするものがあつた。そして私の喜びとは別に、りょうたの冒険に付き合う度に彼も大喜びだった。友情関係は完璧に出来ていた。もし生まれ変わるものがあつたならば、私はりょうたを相棒にして世の中を知っていきたかった。しかし一週間のボランティアもやがて終わり、惜別の時がやってきた。私は「子供を傷つけたくない」からと言って嘘は吐かない。だから真つ直ぐな言葉で別れを告ぐことに決めた。「また会おうな!」と、最後の「みんなの場」が終わると、玄関で言った。「うん」と彼は頷いてくれたが、これが一週間で最も幸せなことだった。同時に最も切ないことでもあつた。なぜかよくわからない。ただ、また会うことを切に願う。

こうして私の石巻でのボランティア活動は幕を閉じた。ひたすら奉仕する姿勢で行つて来たが、私がしてあげた事は、私が得た事と同じくらいあるように思う。それは別に、私がなにかを得ようと、そう求めて石巻へ行つたから得たわけではなく、ただ、物事を吸収する外向的な姿勢を保ちながら、仕事を与えられるがままに果たしていく内に身に付いたものである。

人を助けることによって人は成長する。これも学んだ事の一つである。

(二〇一二年四月三日)

福島の子どもたちを迎えて

「兵庫県のキャンプに参加して」 小学三年 白谷莉帆

恩田 怜

二〇一二年八月四日の朝、三田市立学園小学校に福島の子どもたち八人の元気な声が響く。大型バスに乗って十二時間も揺られてきたのに。県民交流広場の教室に荷物を置き、一休みして「ほうらい牧場」へ見学と体験に、サン☆レク2012の始まりである。

阪神淡路大震災のとき全国のボランティアに救われた神戸で、「人にやさしい社会を」を全国に発信しようとNPOヒューマンビジョン（神戸市・理事長恩田怜）が発足した。今年は福島の子どもたちの保養プログラム「サン☆レク2012」（三田レクリエーションキャンプ）を「第十回アジアハウス」として留学生と日本の学生たちとの五泊六日のキャンプとなった。

お昼には学園小学校に戻り、参加者全員がそろい開会式となる。福島の子どもたちと母親一人、中国留学生三人、大学生七人、スタッフ十人余、地元の子どもとボランティアがそろろう。

「笑顔であいさつしましょう」「電車やバスでは席をゆずりましょう」「困っている人には声を

かけましょう」と、ヒューマンビジョンの会のキャッチフレーズが会長の浜本先生から紹介される。

すいたお腹に、手作りのカレーライス、取れたてのトマトやきゅうり、子どもたちの食べっぷりに驚く。夜はその日から始まった三田まつり花火を見に行き、温泉に入る。

二日目は有馬富士へ登り、お弁当を食べる。午後は料理実習、ハンバーグやサラダなど作る。

三日目は野外活動センターで水着になって水遊び、昼は三田牛のバーベキュー、肉がおいしかったと多くのアンケート。夜は学校の周りで肝試しとなる。

四日目、お絵かき行事、大きい紙に福島のフタバスキ竜と兵庫のタンバ竜をみんなで書く。昼から「人と自然の博物館」で恐竜の化石を見学。おやつのはらはふりかえりの会、夜は歓送会。子どもたちは、もう一泊して新神戸から新幹線で福島へ帰る。素晴らしい感想文をいただいた。

「兵庫県のキャンプに参加して」 白谷莉帆 三年生

「お姉ちゃんと、兵庫県三田市に行ってみない」とお母さんがいました。

「うーん、いつ行くの」

福島の小学生を招たいしてくれるレクリエーションキャンプです。八月三日の夜バスに乗って出発して、八月四日の朝つきました。子どもは八人です。帰りは八日です。五泊です。本当は、四年生からで一人で行くのですが、私はお姉ちゃんがいるから、さんかしてもいいということになりました。少しドキドキしました。

兵庫県の係りの人が仙台のアンパンマンミュージアムへ行つて来てアンパンマンのパンを買ったそうです。そのパンが朝ごはんでした。兵庫県についたら、三田市の小学生もほうらい牧場で見学や体験をしました。牛が百びきいます。にわとりや犬もいました。牛の大きさにびっくりしました。

まずカスピ海ヨーグルトを作りました。二日ぐらいたつと牛にゆうがヨーグルトになるそうです。それからんにくとたまごを使って、んにくらんごを作りました。お母さんにお土産が出来ました。

私がすごいなあと思ったのが子牛にミルクをのませるきかいです。子牛は、母牛からミルクをのむのではなくて、粉のはいったきかいからミルクをのみます。どの子牛がミルクをのんだのか、のんでいないのかにも反応するようになっていきます。また決まったりよう

しかのめないそうです。牛は、大きさによって分けられていました。目が大きく、体が私よりも大きくてまるで木のようにでした。

夕方に温泉にみんなで入りました。三田まつりの花火はきれいでした。

次の日は有馬富士に上りました。暑くてつらかったけど、セミ、ヘビ、トカゲ、大きなオタマジャクシを見つけたたりといろいろな発見が出来ました。女の子は、先に帰って夕食を作りました。ハンバーグとポテトサラダとフルーツゼリーで、お姉ちゃんもハンバーグを作りました。交流会で、みんながあっという間に食べてしまったのでうれしかったです。おじさんが工作を教えてくださいました。葉っぱや木のえだで、ふくろうとトンぼをつくりました。おじさんはおもしろくてたのしかったです。

三日目は、水着に着がえて川遊びをしました。深くておぼれそうになったのでたすけてもらいました。昼ごはんは、三田牛のバーベキューがたのしかったです。お肉はやわらかくておいしかったです。おなかいっぱいになったら、帰っておやつとゼリーを食べました。温泉から上がってきただめし大会をやりました。まっくらな小学校の中で、おふだをとりながら歩きます。と中でおとながびっくりさせるので、怖かったです。五つのおふ

だをとって帰って来たら、みんなも怖かったといっていました。

郡山に新かん線に乗って帰ってきました。

キャンプは、スタッフの人やボランティアの大学生が親切で、たくさん遊んでくれました。言葉も関西弁が面白くて、ボケとつつこみを教わりました。五日間さいこうに楽しかったです。行く前は、自分だけが三年生だから心配だったけれど、毎日、とても楽しくて、とにかく帰りたくない気分でした。

子どもを知らないところへ一人で送り出す親の皆さんには心配をかけるので、ネットで逐次写真を配信し、少しは安心してもらえたか。若い学生たちや地元の子どもたちが一緒に遊んだことも子どもたちの心に残ったようだ。心配した経費は、福島の子どもたちには交通費の半額を、留学生と学生には自分の食料費を負担してもらった。寄付とスタッフの参加費、多くの差し入れてなんとか賄うことができた。

学園小学校の塚田校長先生、地元の子どもたち、父母の皆さんのボランティア、地元企業の協力など多くの善意をいただきました。ほんとうにありがとうございます。この活動は今後

も長く続けなければならぬという思いで、散会となりました。

新神戸駅でみんなを見送り、ほっとする。無事に笑顔で帰って行ったのが何よりも嬉しい。

最初は子どもたちを二〇人くらいは呼びたいと大型バスを手配したが、同時期に明石や宝塚、丹波などの計画もあり、参加は八人になった。

費用で大きかったのがバス代、帰りは新幹線に変更し結果的にはよかったのかもしれない。

食育という観点から、自作の有機食材を中心に安全なものに限定してすべて手作りした。

毎夏のアジアハウスは五〇人を超える大所帯でいつも料理長を引き受けてきたが、その経験が役に立った。野菜や魚など多くの差し入れもあり、安全でおいしい食事ができたと喜んでいる。

